

笹本まどか（福島県福島市）

タイトル「蕨医者たぬきへのあこがれ」

町の静かな一角に、ひっそり佇む診療所。雑草の生い茂る敷地の中に、本に埋もれて座しているのは、自他ともに認める蕨医者たぬき。

目の相談にいらしたご婦人が言う。「先生、庭の雑草をすこしは手入れをしたら。」たぬきは首を振って答えるだろう。「とんでもない。やつらは立派な薬草なんです。わたしが世界各地から収集してきたものなんですよ。」

お腹を下した子どもがやってくる。たぬきは子にあたためかいココアを与え、戸棚から徐に梅肉エキスの小瓶をとりだす。そして子どもに顔を近づけて決まり文句を言うことには「これはね、祖母直伝の特効薬でそりゃあ酸っぱいけども、一口で効くのさ。」

足の弱ったご老人がやってきて、足の不調を訴えると、たぬきがにっこり笑って言うことには「毎日ここの囲炉裏へ、お茶を飲みに来て下さいよ。」それから、先端にふくろうを彫り付けた特製の杖をプレゼントする。

体の不調を訴えるストレスでかちかちになったお父さんに、こっそり囁いて言うことには「月のきれいな夜にまたいらっしやい。とっておきの縁側があるんです。一緒にお酒を飲みましょう。」

日曜日は、朝から往診にでかけるたぬき。自分で調合した薬草の小瓶がつまった木箱と、碁盤と、酒瓶を三種の神器とし、自転車にまたがり、町内の家を渡り歩く。近頃顔を出さないおトミさんは元気かしら、おウマさんとおウマさんに預けた不登校のあの子は元気に畑仕事をしているかしら、ステラのおばさんは今日もプラムの砂糖漬けを出してくれるかしら、三丁目のおじいさん方はゲェトボウルで腰を悪くしていないかしら、中小路老先生に今日は碁で勝てるかしら、酒のつまみは何を用意してくれているのかしら、そんなことを考え、白衣をたなびかせて走るたぬき。そして一人ひとりの元気を確認して、最後に町内ではガクシャとして知られる中小路老先生のお宅を訪ねる夕月夜。酒に囲碁に文学談にすっかり満足して中小路先生宅をほろ酔い気分で作る浮月夜。

酔い目に、蕨の中の診療所が見えてくると、たぬきはほっと、今日も仕事を終えたしあわせのため息をつく。

そんな蕨たぬきになれば、いいのにな。